

## アジア舞台芸術祭について

宮城さんが、日本の現代劇はヨーロッパ演劇の輸入だといった。

だったら本当の日本の現代劇ってなんだろうと思った。

私たちは気づかないうちに西洋かぶれしているのかもしれない。

日本古来の美しさは失われ、ハンバーガーとiPhoneを手に持ち、文楽が危うい中でミッキーのショーを鑑賞するのは楽しいことなのだけれど、もう一度アジア人ってことを考え直してもいいんじゃないか。

というわけで、せっかくだから日本人俳優の良さをほかのアジア圏に、世界に発信できたら、もっと日本の演劇も俳優も注目されるかな、なんて考えたので、アートキャンプ受講時はこの国際交流を通して感じた日本人俳優のいいところを日本以外の国から来た皆さんに聞き出してみようと思った。

中野茂樹さんの「**Waiting for Something**」に出演されていた韓国人女優さん。彼女は「日本人俳優の良さは？」という質問に、「とても周りを気にされる」と答えてくれた。

しかし「お母さんの十八番」の演出家、朴章烈さんにも同様に伺ったところ日本人と韓国人俳優の違いは特にないと言っていたし、実際私も舞台上の韓国人女優さんに、日本人とのお芝居の違いや雰囲気を感じなかったのは事実だ。やはり土地と顔が似ていると、感覚も似るのだろうか。

他にもいろいろな方に聞いたのだが、実は明確な答えを提示してくれた海外の方はいなかった。通訳される際に多少ニュアンスが変わって伝わっているのか、話し手があえてぼやかしているのか、多くの方が日本人参加者の人間性については教えてくれるが、日本人俳優のよいところについては一向に答えが出ない。

オーディションから見学して感じたこととしては、確かに日本人俳優は他の国の俳優に比べて声量や身体能力の面で頼りない部分が多く、また言葉の通じない外国の方たちに対しても言語に頼りがちに思えた。だから、ああ日本人俳優のいいところってないのかな、そう落胆しかけたとき、一人だけ私にずっと寄ってきて「僕は間だと思います」と教えてくれた方がいた。国際共同制作ワークショップEXTの演出をされている広田淳一さんだった。実はそれについて長く話す機会は持てなかったのだが、おっしゃるに「間」とは舞台空間のことらしい。日本のもつ茶道や華道の空間美がよしとされるように、広田さんいわく、日本人だと演出家が言わなくてもささっといいポジションについてくれるらしいのだ。これらは単純に日本人の好みの空間演出だからだと言われたらそれまでなのだが、日本人俳優は間が得意です、なんてフレーズをつけたら、ちょっとしゃれてるなと思った。

話を変えると、上演作品の中で気になったのはデリーの演出家、ズレイカ・チャウダリーさんの作品だった。

自分は、日本人はわからないことを嫌う傾向があると感じていて、それが芸術を遠ざけている一因になっていると思っている。わからないことは退屈なことなのなのだ。マハーバーラタを元書き換えたズレイカさんの作品は、はっきり言ってわからなかった。もう開始5分で理解不能に陥り、終始ハテナが頭の上を飛び交った。正直、苦手だなとさえ感じた。演出家の意図が汲めなかったのだ。わからない。チャウダリーさんはデリーで売れっ子の芸術家と聞いた。でも私にはわからないのだ。

自分もわからないことが本当にわからないと、ちょっと逃げたい気分になる。

しかし知らない文化に触れる。それこそ国際交流なのかなとも思う。

日本人俳優が千差万別いろんな人間がいるように、海外の俳優にもたくさんのルーツを持った人間がいる。だから一概に「この国の人はこんな感じ」とは決めるには時期がまだ早い。

しかし言えるのは、韓国の俳優はとてもチャーミングだったし、演出家は思慮深かった。台北の俳優は身体能力と音の直観力に優れていて、デリーの演出家はとんでもない作品をもってきた。それだけといえば「それだけ」だし、これが次につながる「それから」なのかもしれない。

堀川 炎